

## スタンダール論

### — 塔と変容 —

佐々木 涇

#### 序

《今朝、1832年10月16日、私はローマのジャニコロの丘の上のサン・ピエトロ・イン・モントリオに居た》<sup>(1)</sup>

このように始まるスタンダール *Stendhal* (1783—1842) の告白的自伝『アンリ・ブリュラルの生涯 *Vie de Henry Brulard*』は、彼の死の71年後の1913年に完全稿が発表された。ジャニコロの丘からローマ市を一望に見渡し、描写した後、彼自身の五十歳という年齢を意識した文章が記されている。この自伝の冒頭部分の日付けは、虚偽の記述で、実は別の場所に居たことが明らかにされている<sup>(2)</sup>。つまり自伝とは言いながらもフィクション風に記すのは、例えばスタンダールの本名はアンリ・ベール *Henri Beyle* であり、それがアンリ・ブリュラルとなっていること、そしてジャニコロの丘に立った日付けのことなどを考えれば次に引用する年齢を意識してのことであろう。またラファエロ *Raffaello Santi* (1483—1520) の「変容」を導き出すためのものと思われる。この丘にあって、ローマの町を一望に見ながら、ヴァチカンのこの絵を思い浮かべることは、天空に浮くキリストのごとく自己を高みに引き上げることである。つまり自己の生涯を単に人間社会に埋れさせるのではなく、また立身出世のごとき歩みを登りつめるのではない。自己の生を高みに引き上げるためであると言えよう。

《ここは、世界でたったひとつの場所なのだ、と私は夢見ながらひとりごちた。古代ローマは私の意に反して近代ローマに勝利を治めていた……なんと壮麗な眺めだろう！ラファエロの「変

容」が二世紀半の間にわたって賛えられたのはまさしくここなのだ。それがヴァチカンの奥に埋れているあの灰色の大理石でできた陰気くさい画廊とは何という違いだろう！二百五十年もの間、こうしてこの傑作はそこにあったなんて、二百五十年！……ああ！三ヶ月後には私は五十歳になる。そんなことがあるのだろうか！1783年、93年、1803年と私は指をおって数える。そして1833年には五十歳。そんなことがあり得るのだろうか！五十歳だなんて！》<sup>(3)</sup>

キリストの変容が地上から天へのそれであることはここに説明する必要はあるまい。

スタンダールはすでに著名な『赤と黒 *Le Rouge et le Noir* (1830)』、『恋愛論 *De l'Amour* (1822)』を出版しており、いずれも「変容」を主題としていない。しかし『赤と黒』ではジュリアン・ソレル *Julien Sorel* の社会的な上昇志向の姿勢が描かれている。だが、未刊の小説のヒロイン『ラミエル *Lamiel* <sup>(4)</sup>』のごとく、上流社会の人間たちの間に入り込み、泳いでいるわけではない。貴族であるレナル夫人 *Mme de Rênal* やマチルド *Mathild* に対して、復讐を意識した接近、そして神学校に入り、貴族たちと対等になり得る僧侶としての歩み、それらはジュリアンの野望である。「赤」がフランス革命以後の立身出世の手段としての武、つまりコルシカ生れの小男ナポレオン *Napoléon* (1769—1821) のような立身出世を象徴し、「黒」がもう一方の手段として、神に仕えること、つまり僧侶を象徴しているのは拡く知られている。スタンダールはジュリアンにこの後者の道を歩ませることにするが、ジュリアンの野望は果し得ずに終る。

15～17世紀のイタリアでのいくつかのエピソードが記録された写本を手に入れたスタンダールが『ファルネーゼ家興隆の起源 *Origine de la grandeur de La Famille Farnése*』<sup>5)</sup>を素材にし、時代を革命後に移して著わしたのが『パルムの僧院 *La Chartreuse de Parme* (1836)』である。1835年の末の52日間で口述または執筆で描かれたこの小説の主人公は北イタリアの貴族の家に生れたファブリス *Fablice* である。この翌年に着想し、未完に終わった『ラミエル』のヒロインが、孤児院の出身であり、やがて上流社会に辿りつく。ジュリアン・ソレルの女性版とも言えよう。この小説が『パルムの僧院』のように一気に書きあげることができずに未刊に終わったのは、「変容」を成し遂げたからであり、スタンダール自身の内部に於いて、精神的充足を得ていたからであろう。その現れが『パルムの僧院』であり、私自身がこの作品に注目する由縁である。従って、今や上昇志向の心意気を持つラミエルよりも、彼女を精神の面で育成しようとするサンファン医師 *Docteur Sansfin* に、スタンダールが関心を抱いても不思議ではない。

本論の冒頭に引用したローマのジャンニコロの丘・ジュリアンがパリに出る前に高い岩の上でナポレオンを象徴する鷲を見る場面、またファブリスの牢獄として使われるファルネーゼ塔、ラミエルの塔などの遠くを見渡せる高い所が物語の主人公たちに深く関り合っている。マルセル・プルースト *Marcel Rroust* (1871—1922) が指摘しているように精神の高みに到達することを意味していると言えよう<sup>6)</sup>。

スタンダールの外界での上昇志向ではなく、内部にあるが故に「変容」として据えることができよう。

#### <註>

1) *Stendhal : Vie de Henry Brulard*, Classique Garnier, 1961, p. 5

2) 上記のテキストに序文を書いている *Henri Martineau* 氏は、その序文で、スタンダールが『アンリ・ブリユラルの生涯』の原稿の余白に「*Book commencé le 23 novembre 1835, 1835年11月23日に始めた本*」という書き込みがあることを報告している。従ってこの冒頭の日付けは作為的であり、さらに *Martineau* 氏はこの日付けの時

にはアブルッチ山系 *Les Abruzzes* を旅行していたとしている。

3) *Ibd.*, p. 6

4) 註2の *Henri Martineau* 氏によれば、1839年10月1日からこの小説が書き始められたようである。この小説を初めて世に出したのはストリアンスキー *Stryinski* で1889年である。この論文作製にあたって使用したテキストは *Stendhal : Romans et Nouvelles II*, *Bibliothèque de La Pléiade*, Gallimard, 1952 に収められたものである。

5) これも上記註4のテキストに所収されている。また1902年にストリアンスキーによって、イタリア語から翻訳されて出版されている。

6) 人文書院『スタンダール全集2』の生島遼一氏の解説の中で指適されている。

#### I—1

「知識」の取得もしくは「知的世界」に対して情熱と執着を持つ者を、およそそれらに縁のない他の者が見れば偏狭な人間と判断してしまふことが多い。自己の保有する世界を神聖視するがためであろう。『パルムの僧院』の主人公ファブリスの師であるブラネス師 *abbé Blanès* は村人からそのように見られ、魔術師と言われていた。事実ブラネス師は、《鐘楼の最上階で毎夜を過ごしていた》<sup>1)</sup>のである。この《鐘楼》がブラネス師の精神の営みの場である。夜ごと、粗製の望遠鏡で星を観測し、占星術に熱中している。ファブリスの父、デル・ドンゴ侯爵 *Le marquis del Dongo* の依頼でラテン語をファブリスに教えはするが、幼いファブリスの興味を魅くのは、師が《権力者たちの失墜や世界の局面を変える革命などの正確な時期を見つけるためにその生を過ごしていた》<sup>2)</sup>からである。ファブリスのみがこの《鐘楼》に登ることを許され、精神の営みの場に踏み込むことができた。そして予言や種々の兆を判断する術をファブリスは知った。単に星を見るのではない占星術によって、社会の動きなどを予言するにはその陰に適確な社会認識がなければなし得ないはずである。

高い《鐘楼》の上で望遠鏡を使って眺めることは、言わば観察者の視点である。観察者は、単に人間の生態を見るということではなく、その地の

風土，生活環境を見ることが可能である。一望の元に広がる風景は，眼下の世界の全体の姿を見せる。地理的な要素が人間の日常生活への影響を空想せしめ，観察者がその姿を想像することさえ可能にする。さらに望遠鏡を使用することは，全体を捉えた後にその世界の小さな部分の観察を容易にし，その対象物の姿をより明確にする。そして注目すべきこととして，異なる場所での人々の動きを同時に観察することができ，彼らとの一体感を獲得することさえ可能になる。その結果彼らの中に感情移入もできる。もちろん想像力のなせる技である。小説家のごとき視点を保有することで，別の人生を知ることができよう。

父，デル・ドンゴ侯爵に追われているファブリスは密にブリアンタに戻り，ブラネス師の《鐘楼》で師と共に一夜を過ごす。

《ファブリスは，下から見られずに眺めるのに相応しい場所を探した。この高さから庭園や父の館の中庭さえにも，彼の目がとどくのに気がついた。……父の衰弱が彼の心によみがえった。—それにしても，本当に変だな—彼はひとりごとを言った。—父さんはぼくと35歳しか違わない。35歳と23歳で，まだ58歳じゃないか！—彼を決して愛さなかったその厳格なひとの部屋の窓に注がれた眼には，涙があふれた。……しかし，ファブリスの感情に，それ以上に生き生きと語りかける風景があった。この鐘楼から彼の視線は，数里離れた湖の枝のように二つに分れた部分に及んだ。そしてこの崇高な眺めは，彼に他の全てのことを忘れさせた。彼の内部に最も高貴な感情を呼び起していたのだった。幼い頃のあらゆる思い出が，群をなして彼の思考を席捲した。鐘楼の中に閉じ込められたこの日は，おそらく彼の生涯で最も幸福な日々のひとつとなったであろう。》<sup>(3)</sup>

スタンダールは，このファブリスの心をさらに次のように描写する。

《その至福は，彼の性格にはおよそ異質な思考の高みへと彼を導いた。こんなに若いはずの彼は，まるで，すでに晩年に達したかのごとくに彼の生涯の種々のできごとを省みていた。》<sup>(4)</sup>

ブラネス師がファブリスにとって，《本当の父であった》<sup>(5)</sup>とスタンダールがするのは，断わる

までもなく，ファブリスの心を育てたことを意味する。鐘楼に居たことで得た幸福感は，そのようなブラネス師の持つ世界に触れたが故に生じ，森も見え，木も見ることのできるような場所に居たがためである。ファブリスを追放した父を憎んでも良いはずなのが父の衰弱を知り，父を思うことで涙ぐむ。さらにパルムの宮廷を《意地悪で，程度が低い》<sup>(6)</sup>と判断する余裕さえ生じた。眼下に広がるコモ湖を前にしてファブリスは述懐する。

《この遍歴を果したら，ぼくはこの崇高な湖に時々来よう。少くともぼくの心にとって，同じ美しさを持つものはこの世にあり得ないのだ。そんなに遠くへ幸福を求めに行っても何にもならぬ。そこの，ぼくの目の前にあるんだ！》<sup>(7)</sup>

ファブリスがこのようような幸福感を味わうのは，明らかに彼自身の内部，精神世界の充足による。それは至福がどのような時に生じるかが意識されていない。しかし「変容」の前触れであると言えよう。

＜註＞

- 1) Stendhal : La Chartreuse de Parme dans <Stendhal: Romans et Nouvelles I, Bibliothèque de La Pléiade, Gallimard, 1952>, p. 38
- 2) Ibid., p. 39
- 3) Ibid., p. 174—175
- 4) Ibid., p. 175
- 5) Ibid., p. 170
- 6) Ibid., p. 175
- 7) Ibid., p. 176

## II—2

デル・ドンゴ侯爵が次に引用するような考えを持っているとスタンダールが描写すると，そこに19世紀初頭の貴族たちの姿が重なる。

《侯爵は知識に対して頑強な憎しみを公言していた》<sup>(1)</sup>

このことばを吐かせることで，スタンダールは革命のもとで不遇の時を耐えている貴族たちの思いを表現している。もともと絶対封建制の下に生じた貴族はその栄華を極めていたが故に，その思考が保身のためであることは言うまでもない。ファ

プリスの父、デル・ドンゴ侯爵はオーストリアの間諜として北イタリアにあって、ナポレオンや自由を信奉する人々を良しとしなかった。その気位はプラネス師を「至極単純に、こんなにも低い身分の人間にしては余りに理屈ばいという理由で軽蔑していた。」<sup>(2)</sup>このデル・ドンゴ侯爵の姿は、またスタンダールの父とも重なる。スタンダールは、父のシェリュバン・ベール Chérubin Bayle (1747—1819) の「宗教的貴族教育の犠牲者であった」と自分をみなしている。<sup>(3)</sup> また家族の人達を次のように記してさえている。

「私の圧制者たちは、一時たりとも彼ら自身を裏切ることなどなかった。」<sup>(4)</sup>

弁護士で政治的には王党派である父は「溜息をついて—もうおしまいだ、奴らはあの人を殺したんだ」<sup>(5)</sup>と、ルイ16世 Louis XVI (1754—1793) の処刑を聞いて若いスタンダールの前で、このようにもらす。彼の「父が、新体制（当時の貴族達の流行語）を憎悪しているのを自慢していた」<sup>(6)</sup>が故に、革命派から「特別注意人物 *notoirement suspect*」の一人とされていた。スタンダールが愛することのできなかつたこの父は、「おそらく自分の息子のために家庭教師を持つことをとても誇りに思いながら、平民の子供たちと一緒に私（スタンダールのこと）が出かけるのを見るのを、他に比較するものがない程に恐れていた」<sup>(7)</sup>のである。このような境遇から解放されることを願い、事実そのためにある企てを目論んだこともある<sup>(8)</sup>。自分を取巻いていた環境をスタンダールは「ライアンヌ圧制 *la tyrannie Raillane*」<sup>(9)</sup>と呼び、家庭教師と父の「教えること全てを憎悪する」ことさえした。<sup>(10)</sup> そのため彼らの支持するルイ16世の処刑を望みさえしたのである。<sup>(11)</sup> そしてこの処罰を知り、

「私の生涯で味わった数ある最上の喜びの感動のひとつに私はとらえられた。おそらく読者は私が残酷であると思うだろう。だが私が十歳の時と同じように、五十二歳の今でも同じである」<sup>(12)</sup>

と告白するスタンダールは幼い時からの感覚的とも言えるべきものによって、革命を支持していたのである。若干十六歳にして「若い將軍ボナパルトがフランスの王となるのをうれしがっていた。

」<sup>(13)</sup>

この一方で、ファプリスのプラネス師のごとき人物が居た。母方の祖父で医師のアンリ・ガニョン Henri Gagnon (1728—1813) である。彼の娘婿シェリュバン・ベールが革命派に「特別注意人物」とされているのに対し、彼は「単なる注意人物 *Simplement suspect*」であった。スタンダールの父の書棚から見つけ出したセルバンテスの『ドン・キホーテ』を隠れて読んだ。「ライアンヌ圧制」のもとで、ひそかに腹をかかえて笑いながら、スタンダールは読み、祖父に話した。

「私の祖父は、私が話して聞かせたドン・キホーテに対する私の熱狂を非常に嬉しがった。それも私が彼にほとんど全てを話したからであり、この六十五歳の秀れた人物は、実際のところ私の唯一の友人であったからである。」<sup>(14)</sup>

この祖父は、種々の本をスタンダールに示し、「文学に対する尊敬を伝えた。」<sup>(15)</sup>

またプラネス師がそうであるように、天文学を心得ており、スタンダールに「知」の世界、つまり精神の営為となる世界を桓間見せている。最も合理的な世界にある数学に興味を示したスタンダールは、父の言う平民たちの居る学校に入り、パリにも出かける素因となった。ライアンヌ圧制、そして宗教的貴族教育からの解放である。それがいかに、スタンダールにとって切実かつ重要なことがらであったかは以下の引用で理解できよう。

「モリエールがその思想を認識させるために使ったブルジョワ的で低級なあらゆる細々とした事が、私は大嫌いだった。これらの事がらは、余りに不幸だった日々を私に思い出させる。…ブルジョワ式流儀の中で、低級で取るに足らぬ全てが私にグルノーブルを思い出させる。グルノーブルを思い出させる全てのものが、嫌悪の情を私にもたらす。いや「嫌悪」では上品だ。「胸くそが悪くなる。」」<sup>(16)</sup>

この思いは、単に憎悪するということにとどまらない。彼自身の精神世界に於いて明確に位置づけられている。ジュリアン・ソレルに階級意識とも言ふべきものを備えさせたのはその現われであろう。また高みにある精神の営みにのめり込むための「変容」へのバネともなり得るものである。

〈註〉

- 1) *La chartreuse de Parme*, Bibliothèque de la Pléiade, 1952, p.38
- 2) *Ibid.*, p.39
- 3) *Stendhal : Vie de Henry Brulard*, Garnier, 1961, p.83
- 4) *Ibid.*, p.83 スタンダールはこの自伝の中で、父シェリュバンと母方の叔母セラフィ *Séraphie* (1760—1799) を憎悪して書いている。
- 5) *Ibid.*, p.99
- 6) *Ibid.*, p.103
- 7) *Ibid.*, p.77
- 8) *Ibid.*, p.110 の第十二章で、〈ガルドンの手紙 *Billet Gardon*〉と題して詳細に記している。スタンダールが十一歳の時に偽手紙を書いた事件である。発送人をガルドンとして、スタンダールを〈希望大隊 *Les Bataillons de l'Espérance*〉に送るよう要請した手紙である。これは、グルノーブルの革命派が組織したもので、対象者は8歳から18歳の青少年で火器を扱う訓練をしたりした警察組織のようなものだった。祖父にさえも有罪とされ、スタンダールは三日間食事抜きという罰をもらっている。
- 9) スタンダールにとっての二人目の家庭教師ジャン＝フランソワ・ライアンヌ *Jean-François Raillanne* (1756—1840) のことで、彼に対して余りに厳格だったようである。そのままライアンヌの教えを受けていたら、自分は悪党になっただろうと告白している。
- 10) *Ibid.*, p.79
- 11) *Ibid.*, p.98
- 12) *Ibid.*, p.99
- 13) *ibid.*, p.327
- 14) *Ibid.*, p.85
- 15) *Ibid.*, p.87
- 16) *Ibid.*, p.85~86

### I—3

ファブリスが、庇護者たるサンセヴェリナ公爵夫人 *La duchesse San Sévérina* から離れ、ミラノを中心に自由で放蕩の生活をしたのは何故か？ スタンダールはそこに何を意味させたのか？ スタンダール自身がライアンヌ圧制と呼ぶ中であって、グルノーブルの町の子供たちと遊ぶことを禁じられていたのと無縁ではあるまい。この事実と考え合わせてみれば理解もできよう。ラミエルがミオサンスの館にあって、立ち居振るまいを全て

貴族風にしなけねばならないと規制されながらも、彼女を育てたオートマール家 *Hautemare* に戻れば、田舎娘の服装をし、木靴をはく。つまりラミエルは気どりを棄てるのだった。

≪自ら求めた質素なこの振舞は、彼女に村中こぞっての称賛をもたらした。とても上品な帽子で飾られるのに見なれていた頭の上に、今ある余りに醜い綿製の帽子は、羨望というものを和らげた。彼女が木靴と百姓娘のスカートをはいて村へ出かけると、村の皆はラミエルにほほえみかけた。≫<sup>(1)</sup>そして、彼女のことは使いも同様である。≪「あら！だつてさ！」とラミエルは叫んだ。——そのことは、館でとりわけ彼女が口にするのを禁じられていた下品なことばのひとつだった。≫<sup>(2)</sup>

解放される精神、そこには人間の行為全てが許されるような雰囲気がある。このラミエルや放蕩にふけるファブリス（もっとも、『パルムの僧院』に於いては、それらに関する記述は少い）を描くことは、スタンダール自身の中にそれらを許容する精神があったと言えよう。しかしながら、今や貴族の相手を勤めることさえできるラミエルが手に入れた礼服を養母が見て、嫉妬深げな懇願を表わにする。それはラミエルに不愉快さをもたらした。

≪そのドレスに関する頼みごとは若い娘を仰天させた。つらいさまざまな思いがどっと押しよせた。彼女には愛せる人が居なかったのだ。少くとも心の中で大丈夫と思っていた人達が、他の人達と同じにさもしかったとは！「私には愛せる人が居ないんだわ！」≫<sup>(3)</sup>

さらにスタンダールは、侯爵夫人の館から離れたラミエルの体験を描き出す。

≪そしてとても分り易い方法で、侯爵夫人の事細かく話した上流社会の逸話やあのやさしいクレマン師の教説の中にきらめく機知ある表現の代りに、もっとも力強いということはつまり下品な型で表現された、ノルンマディー人の抜け目のない、俗悪に満ちた考えに、常日頃余儀なくされているのに彼女は突然気がついた、≫<sup>(4)</sup>

村人たちの中であって、自由な魂を持ち得る代りに不愉快さがさらにつきまどった。年頃の若い娘は当然、愛とか恋などについて考える。館で種々

の本を読むラミエルには、恋愛が実際にはどうであるか知らなかった。

《詩人たちをものともせず、村にあってはそういったことは優美さなど何もなかった。全てが粗野で、明確な体験の上に基ついていた。》<sup>(5)</sup>  
ラミエルの眼にするものは、粗野と下品で満ちていたのである。

《いったい私は十六歳なのに、サンファンさんが言うように、五十歳の女なんだわ！私は何に対しても腹を立てているし、人間全部にも怒りをぶちまけているんだわ。》<sup>(6)</sup>

このような状態にあるラミエルは、読書役として仕えていたミオサンス館から、人知れず書物を持ち出し、読書による精神の営みを侯爵夫人の建てた塔の中で読みふける。

ここに「変容」の傾向と呼ぶべきものがある。「知」の世界へのめり込む傾向をスタンダールはこの部分に於いても示している。精神世界に於ける思考作業に魅せられたのである。スタンダール自身の中に、オートマール夫婦に代表される下層階級に対して、ある種の蔑視とも言うべきものが窺われる。がそれも無知である人間に対してである。ラミエルにこれまで引用したような体験をさせることで理解できよう。そしてスタンダールは告白する。

《私は最も貴族的な趣味を持っていたし、今なお持っている。私は平民の幸福のためになんでもするだろうが、商店の住民たちと共に生きるよりも、毎月十五日間を牢獄で過ごす方が良いのである。》<sup>(7)</sup>

牢獄で過ごすこと、それは他者との関り合いを拒

否することに他ならない。彼自身の世界に没することである。また上流階級の人間たちの無知をも軽蔑していると言えよう。ファブリスの庇護者たるサンセヴェリナ侯爵夫人やモスカ伯爵 *Le comte Mosca* が権謀術数を駆使してパルム公国の君主エルネスト四世と五世 *Ernest* の親子を翻弄させたのもスタンダールの考えが現れているだろう。

《愚かなるものの真の仕事は屋根裏部屋で小説を書くことである。》<sup>(8)</sup>

屋根裏部屋は文字どおり建物の最上階にあり、そこにおいて孤独な作業のうちに小説を書くことは、言うまでもなく知的作業に他ならない。内面世界では、さまざま人間や風景そして社会が映し出され、文字で定着されていく。ここにあってスタンダールは「知」の世界にのめり込んでいる姿をわれわれに見せてくれる。だが至福に至る情感は伝わってこない。

(以下次号)

<註>

1) *Lamiel*, Bibliothèque de la Pléiade, p. 963

2) *Ibid.*, p. 963

3) *Ibid.*, p. 964

4) *Ibid.*, p. 965

5) *Ibid.*, p. 966

6) *Ibid.*, p. 967

7) *Vie de Henri Brulard*, Garnier, p. 236

8) 1831年、領事としてイタリアのチヴィタヴェキア *Civitavecchia* に居たが、そこからのこのコロンブに宛てた手紙に書かれている。